都道府県名	石川県

Ⅰ　学校の概要（平成１５年４月現在）

	石川県羽咋市立羽咋小学校								
学　年	１年	２年	３年	４年	５年	６年	特殊学級	計	職員数
学級数	３	３	３	３	３	３	２	２０	３４
児童数	９３	９２	１１６	８６	８３	８９	５	５６４	

Ⅱ　研究の概要

１．研究主題

一人一人の能力を引き出し伸ばす指導
〜算数科・習熟度別学習を生かして〜

２．研究内容と方法

(1)　実施学年・教科

・全学年（特殊学級を除く）・算数

算数科は，児童の理解度に差が出やすい教科である。しかも，指導内容の系統性も高く，理解がしっかりと定着しないまま進級すると，新たな内容を理解するのが困難になる。そこで，全学年（特殊学級を除く）で習熟度別学習の指導スタイルを取り入れ，一人一人の理解度に応じたきめ細かな指導を図ろうと考えた。

また，指導に当たっては具体的操作を多く取り入れ基礎・基本を確実に習得していくような授業展開が効果的だと思われる児童と，念頭思考や発展的な内容に取り組むような授業展開によって能力が伸びると思われる児童がいることを十分考慮した。

以上，算数の教科の特性や一人一人の児童の実態を考慮し，学年・教科を選択した。

(2)　年次ごとの計画

平成14年度	○テーマ　　自ら考え，共に学ぶ子　−算数科の授業を通して− ○研究の見通し（仮説） ・個に応じた指導をすることで，基礎・基本がしっかりと身につく。 ・基礎・基本をしっかりつけることで，児童が自ら考え，共に学び合うことを通して児童自身の学ぶ力が高まり，確かな学力となる。 ○研究内容・方法 【内容】

平成14年度	・算数科の課題と適切な学習指導方法を明らかにする。 ・カリキュラムと評価規準を関連づけながら，適切な評価方法を探る。 【方法】 ・算数科のとらえ方 ── 算数科における学び 　　└ 算数科における基礎・基本 ・基礎・基本の定着　　個に応じた指導　少人数（３～６年） 　　教科担任制（６年） 　　個別指導を取り入れたＴＴ（１，２年） 　　基礎・基本の時間 ・授業の工夫　　数学的働きかけ 　　数学的コミュニケーション ・評価　　数学的Writing 　　ワークシート，活動での評価 ・カリキュラム　　年間指導計画 　　評価規準の作成

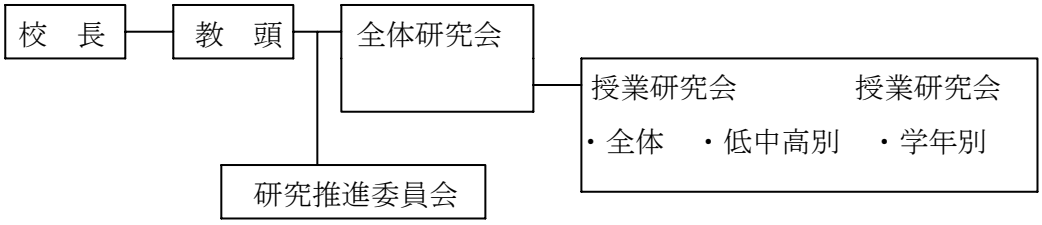
平成15年度	○テーマ　　一人一人の能力を引き出し伸ばす指導 　　−算数科・習熟度別学習を生かして− ○研究の見通し（仮説） 　子どもたち一人一人の能力を引き出し，可能な限り伸ばしていくことは学びの充実感・達成感を生み出し，学習への積極的な態度の育成と共に確かな学力を身に付けることにつながるのではないかと考えた。そのため，一人一人の能力を引き出して基礎・基本の確実な定着を図ると共に，習熟度別学習によって持てる力をさらに伸ばしていく指導の在り方について研究することを中心課題として取り組む。 ○研究内容・方法 【内容】 ・算数科の授業において，習熟度別学習を効果的に展開していく指導の在り方を明らかにする。 ・習熟度別学習によって一人一人の基礎・基本の定着や能力の伸びがどうなったのかを明らかにできる評価の在り方を模索する。 【方法】 ・習熟度別学習を意識した単元構成の工夫を行う。 ・教材の本質を明らかにし，その本質に基づいた基礎的内容（教材の本質に照らし単元全体を通して特に重点としたい基礎・基本）と発展的内容を洗い出す。 ・上記の学びにおいて，どんな場面で習熟度別学習を取り入れれば効果があるのか予

	想し指導計画にも明示する。 ・毎時間作成する指導略案に「基礎・基本に関するねらい」と「発展的な内容に関するねらい」を明記し，子どもにつけたい力を明らかにすると共に習熟度別学習をどんな観点でいつ取り入れるのか決定する。 ・基礎・基本の定着を図るコース（習熟系）と，基礎・基本を習得した上で発展的な内容に取り組むコース（発展系）にそれぞれのねらい達成に向けてどんな教具やプリント類を工夫・活用するのか考える。 ・習熟度別学習を取り入れたことでどんな成果と課題があったのか，１時間ごとに担当の教師間で話し合い，次時の指導への手立てを持つ。 ・授業研究の視点を明確にする。 習熟度別学習を取り入れるタイミング，支援は適切であったか。 グループ編成・形態は適切であったか。 基礎コースと発展コースのそれぞれの学びの実態はどうであったか。 【昨年度からの変更点】 ・昨年度は，３年生以上を対象に少人数指導のスタイルを取り入れ，主に等質・課題別のグループ編成で指導していた。今年度は，「一人一人の能力を引き出し伸ばす」という意図で習熟度別学習に焦点化し，全学年の児童を対象として実践を行った。 ・児童の学びの状況をよりよく把握し，きめ細かな指導を行うには学級担任が算数科を担当することは必要との考えで，教科担任制のスタイルはとらないことにした。

平成16年度	○テーマ　　一人一人の能力を引き出し伸ばす指導 −習熟度別学習を生かして− ○研究の見通し（仮説） 子どもたち一人一人の能力を引き出し，可能な限り伸ばしていくことは学びの充実感・達成感を生み出し，学習への積極的な態度の育成と共に確かな学力を身に付けることにつながるのではないかと考える。この考えに基づき，平成１５年度は，算数科において習熟度別学習を取り入れて成果を上げた。平成１６年度はこの研究を基礎として，国語科などの他教科についてもテーマにせまる研究を行いたい。 ○研究内容・方法 【内容】 ・算数科のみならず他教科の授業においても，習熟度別学習を効果的に展開していく指導の在り方を明らかにする。 ・習熟度別学習によって一人一人の基礎・基本の定着や能力の伸びがどうなったのかを明らかにできる評価の在り方を模索する。 【方法】

	・算数科のみならず他教科の指導においても，各教科のどんな部分で習熟の差が見られるのか的確に把握し，習熟度別学習のスタイルを取り入れていく。 （例として考えられること） ・国語科における「話すこと」「書くこと」などの面で。 ・理科における「科学的思考に基づく観察・実験」などの面で。 ・音楽科における「表現の工夫」「リズム・旋律づくり」などの面で。 ・家庭科における「実習（裁縫・調理）」などの面で。 ・体育科における「自己の能力に適した課題への取り組み」などの面で。 ・授業研究の視点を明確にする。 ・習熟度別学習を取り入れるタイミング，支援は適切であったか。 ・グループ編成・形態は適切であったか。 ・基礎コースと発展コースのそれぞれの学びの実態はどうであったか。 ・自己評価の場面を適宜設定し，自らの学びをふり返ると共に学習への意欲を喚起できるようにする。

(3)　研究推進体制



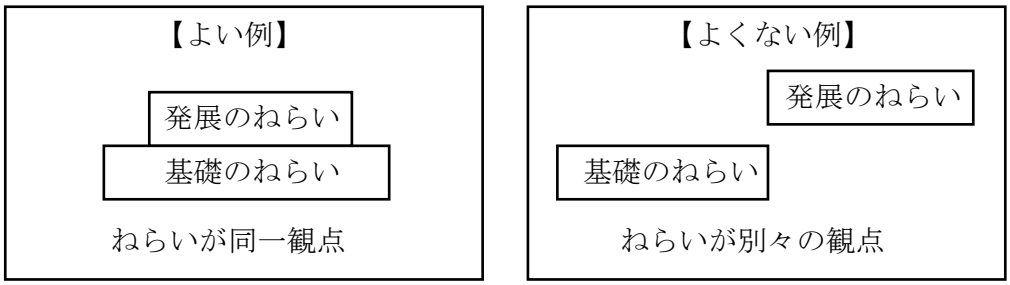
Ⅲ　平成１５年度の研究の成果及び今後の課題

１．研究の成果

<u>習熟度別学習を取り入れた指導の在り方</u>

(1)　ねらいの設定

１時間の中で習熟度別学習を導入し，それぞれのコースの学びを展開して「基礎・基本の内容を確実に定着できるようにする」には，「基礎のねらいの上に発展のねらいがある」と捉え，同じ観点にした方が効果的であることがわかった。

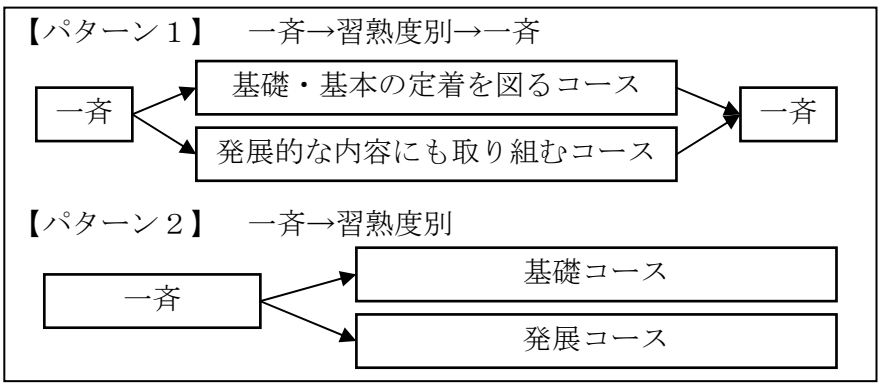


１時間のねらいの設定

(2)　習熟度別学習を取り入れるタイミング

１学期は１時間のねらいに応じて習熟度別学習のスタイルを取り入れてきたが，一人一人の学びを継続的に把握しづらいという反省があった。

そこで，２学期からは単元全体を見通した習熟度別学習を展開していくことに留意し長いスパンで習熟度別学習を行うようにした。児童にとっては以前よりも学ぶ上で安心感が見られ，教師にとっても担当した児童の学びについてよりよく把握することができた。



(3)　グループ編成における支援

レディネステストなどの結果だけでなく，本人の意思を尊重し教師のアドバイスも適宜取り入れて本人の納得する形でグループ編成を行うようにしている。

また，グループ編成を行うにあたっては「習熟度別学習の視点」を児童に示し，自分の能力について自己評価することを大切にしてきた。

【習熟度別学習の視点】

①考え方の程度	②処理の程度（速さ）	③理解の程度
・自力解決か，ヒントか	・計算力，作図力など	・計算，測定など

(4)　学びの場の設定（教室内，学習室の活用）

グループ編成の後，基礎と発展の２つの学びの場として「教室内で分かれる」「教室と学習室に分かれる」のいずれかを選択し，実践を試みた。グループ編成によって学びの意識がとぎれないことや，少しでも多くの学習時間を確保するということを大切にして実践してみた。

以下，それぞれの方法の長所・短所をまとめてみる。

	○この形態の長所	▲この形態の短所
教室内で２つに分かれる	○かいたり，つくったりする作業的な学習に有効。（図形，グラフなど）。 ○グループの考えを相互交流する流し方に有効。	▲考えを述べ合い，思考を練りあげていく学習には不向き。 （声の交錯，課題への集中など）
教室と学習室に分かれる	○互いに考えを述べ合い，集団解決していく学習に有効。 ○グループに分かれての学習が続くとき，意識の継続が図りやすい。	▲多様な思考にふれる機会がげんていされやすい。 ▲授業中の移動は，低学年には難しく，訓練が必要。

２つ形態の長所と短所

評価の在り方

(1)　ＴＴのよさ

新しい単元の学習に入る際，当該学年の学級担任と算数科担当で教材研究の時間を持ち，教材の本質や基礎・基本，発展的内容は何か，どこで習熟度別学習が入ると有効かなどについて討議してきた。その捉えに基づいて，毎時間指導案にねらいや具体的支援などを書き実践してきた。その成果は，以下のようにまとめられる。

・ＴＴ場面が適宜設定されることで，ねらいや指導内容の共通理解が図られる。
・グループに分かれるまでの子ども一人一人の思考や学びの実態が捉えられ，次時からの学習に生かされる。
・授業後に本時の成果と課題をすぐに話し合い，記録していくことで次にどうすればよいのか見通しがはっきりする。
　（課題の吟味・修正・変更，算数的活動の工夫，グループ⇄一斉の変化など）
・一人一人の学びの変容や高まりなどについて，二人の目で評価できる。

(2)　数学的Writingの活用

中・高学年の段階では，数学的 Writing による評価が有効である。昨年度から本格的に取り入れたが，今年度は「おもしろかった」「よくわかった」「難しかった」などの情意面の記述から一歩踏み込んで，「何がおもしろかったのか。難しかったのか」「自分なりの考えは何か」などを記述できるようになってきた。

その理由としては，以下の点が考えられる。

・習熟度別のグループ編成によって，自分の考えを思い切って表現しやすい雰囲気ができ思いを数学的Writingとして記述しようとする意欲が出てきた。
・自分のよくわからないことやもっとやってみたいことなどについて重点的に学びが展開されるので，思考（試行）する場が保障され，思いを表現しやすくなる。
・教師は一人一人の数学的Writing に目を通し，すぐに赤ペンで思いのすばらしいところをほめたり，励ましの言葉をかいたりすることができる。子どもにとっては学びの意欲の喚起となり，教師にとっては一人一人の学びの評価をストックすることができる。

２．今後の課題

(1)　習熟度別学習を展開するにあたっては，それぞれのグループに応じた学びの展開（課題・設定・教具・指導法などの工夫）を一層心がけ，教師一人一人の個性（持ち味，得意な面など）も発揮し 切磋琢磨していく。

(2)　グループ編成においては子どもの自己選択を尊重しつつも，より効果的な学習集団の編成となるように教師のアドバイスも随時取り入れていく。

(3)　基礎コースにおいては，スモールステップの集団解決型の指導を行ってきたが，きめ細かな支援をしようとする余り，やや教師の出場が多くなってしまった感がある。そこで，来年度は「子ども同士の学び合い」を意識して，子どもの主体的な学びが展開されるよう指導の工夫を図っていく。

(4)　１学期に行われた「県と市の学力調査」では，算数科において平均を上回る成績が得られた。その客観的なデータからも，少人数指導は効果があることがわかった。来年度は，算数科の研究の成果を生かし，他教科でも習熟度別学習のスタイルを取り入れ，実践を積み上げていく。

(5)　現在は，指導する側の人数（加配教員とのＴＴ，学年の全担当教員によるＴＴなど）に応じて習熟度別学習のグループ数を決めている。しかし，いつでも指導者の数を確保できるわけではなく，他教科もこのスタイルで授業を行うことになると時間割の編成上も困難が生じると考えられる。

　そこで，学級担任または教科担任による「一人で指導する習熟度別学習」の授業スタイルにも挑戦し，実現の可能性を探りたいと考えている。

Ⅳ　学力等把握のための学校としての取組

・平成１５年４月１６日に市学力調査（ＮＲＴ全国標準診断的学力検査）を実施。
・平成１５年５月　８日に県学力調査を実施。
・「きほんの時間」（１５分）に計算プリント（百マス，タイムなど）を行い，一人一人の処理・理解能力の確実な習得を図る。
・平成１６年２月　３日に市学力調査（ＮＲＴ全国標準診断的学力検査）を実施予定。

Ⅴ　フロンティアスクールとしての研究成果の普及

１．学校説明会
　・日時・・・平成１５年４月２５日（金）１４：５０〜１５：１０
　・場所・・・羽咋小学校
　・対象・・・保護者　地域の方々
　　（第２回学校説明会を平成１６年２月に開催予定）
２．平成１５年度研究中間発表会
　・日時・・・平成１５年１０月２９日（水）１３：００〜１６：５０
　・場所・・・羽咋小学校
　・対象・・・県内の教育関係者及び小・中学校教員　保護者　地域の方々
３．平成１６年度研究発表会
　・日時・・・平成１６年１０月２０日（水）
　・場所・・・羽咋小学校

・対象・・・県内の教育関係者及び小・中学校教員　保護者　地域の方々
４．学校・学年・学級便りなどで，研究の趣旨や授業の様子を保護者にお知らせ・共通理解
５．研究関係のホームページを製作予定

【新規校・継続校】　☐１５年度からの新規校　☑１４年度からの継続校

【学校規模】　☐６学級以下　☐７～１２学級
☐１３より１８学級　☑１９ー２４学級
☐２５学級以上

【指導体制】　☑少人数指導　☑ＴＴによる指導
☐一部教科担任制　☐その他

【研究教科】　☐国語　☐社会　☑算数　☐理科
☐生活　☐音楽　☐図画工作　☐家庭
☐体育　☐その他

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】　☑有　☐無